

産業道路と自動車専用道路

三井合名會社參事

矢

野

亮

一

何事も云ふは易く、行ふは難し、吾々が道路の改良を高調し始めてから早や十年になるが、今日猶ほ十分の成績を見る事の出来ないのは寔に遺憾千萬である。無論其の間には帝都を廢墟にした程の大震災災と云ふ非常なる大不幸に出合つて、凡ての計畫を滅茶々々にして仕舞つたのであるが、或る意味に於ては、不幸が却つて幸の種となつて、少くも帝都の道路だけは稍々見るべきものが出來た。今後數年の後には、恐くは帝都の面目を一新するであらう、無論まだ工事中のものも澤山残つて居るから、昨今の市中を通つて見ると、掘つたり、埋めたり、切つたり、繼いだり、捏ねくり返へして膏藥貼りや、繻帶卷や、中には泥の山、泥の海、親知らず、子知らずなどと云ふ、陷穽や、殺人穴まで隨所に其の醜體を暴露して、幾多の市民を悩まして居る行路難ノウサンキウー、御膝元でありながら、まだ王道坦々といふ譯には行かず、至道無難とも云へないのは、實に遺憾である。

是れも過度時代の一現象根本的の大手術をするのであるから止む得ないこと、今暫く辛抱するより外はない嵐の後に晴天あり *after the storm Comes a Calm* 兎も角も不完全ながらも我帝都の幹線道路だけは先づ大體の目鼻がついて曙光の見へたことだけは確實である。

そこで先頃も或る所で道路の改良は已に實行期に入つたのであるから之が宣傳はもう討論終結にしては如何なぞと云ひ出した人もあつた或は然らん吾々も斯く信じたいのであるが残念ながら春風猶未到江州である併し地方の人士も若干目覺めて來たことだけは事實である其の點は吾々も聊か自ら慰めて可なりであるけれども何時も困るのは無い袖は振られぬと云ふ財政難である豫算難である往年(天正九年)原内閣の時に道路會議が開かれて三十年繼續事業として毎年一千萬圓の國庫より補助すると云ふ案も出來たのであるが不幸にして事實は三分ノ一に削減されて了つたそれでも有るものは無きに優るで此三分ノ一の補助で地方道路もボツ／＼改良されつゝ今日に至つて居るのである。

然るに昨今に至つて頗る耳寄の話を聞いたそれは外でもない産業道路の開發と自動車専用道路の新設と云ふことである無論其の内容はまだ聞くことを得ないが新聞の報ずる處に依ると明年度より十年計畫として幹線國道の改良に約一億五千萬圓これに關連せる府縣道の主なるもの六千里の改修に約六千萬圓の補助をすると云ふことである多少遠雷を聞くやうな感じも仕ないでも無いが吾々は之を天籟と信じたいのである兎も角結構なことである世の中は無論日進月歩である別して自動車の發展は實に驚くべき勢であるから是位の奮發は當然あべき筈と思ふ桃栗三年柿八年況

んや既に十年に於ておやである。寧ろ當然過ぎるほど當然の事として、大に之を歓迎し、是非お流れにならぬやう、切に其の實現を祈る次第である。子供でもだんく、成人するに従つて、一ツ身はやがて三ツ身となり、次てまた四ツ身となり、本裁となるのである。何時までもつんつるてんの短衣ばかり着せて置く譯には行かぬ。

二

云ふ迄もなく道路の完成は産業立國の第一義である。道路さへ完成せば、所謂肥料の分配などは、自ら刀を迎へて解くのである。産業の發展亦期して待つべしである。昔は鐵道が出来たら、道路なんかどうでも宜いと考へられた時代もあつたけれども、今日になつて見ると、鐵道が普及され、ば、されるほど道路は一層必要になつて來るのである。所謂停車場道路なるものは、其の片鱗である。鐵道を活かし、鐵道を利用するには、先づ其の片鱗たる停車場迄を港々とか、コーケツトとか、若くは其の附近の主要なる地點にまで之を延長しなければならぬ。道路が鐵道の「フイダー」培養線であると同時に、鐵道は地方産業の「フイダー」である。即ち鐵道は道路を助け、道路は鐵道を助けて互に持ちつ、持たれつ、双々相待つて地方産業の繁榮を將來するのである。此二ツは所謂唇齒輔車の關係を有つて居るのであるから、鐵道本來の使命を徹底せしむる爲めには、是非とも此「フイダー」道路を完成せしめねばならぬ。此は實に國家の義務である。即ち産業道路補助の議ある所以であらうと思ふ。電車の如きは無論一地方限りの局部的のものであるが、夫でも立派な道路の在ると無いとは大變な相違である。併し今後の電車は

自動車と云ふものを看過する譯に行かぬ、現在では或る部分は已に自動車に蠶食されつゝあるが、然し之も道路あつての電車道路あつての自動車であるから、何れにしても道路の益々必要になつて來ることは決して間違ないのである。往年三島通庸さんは囂々たる世論を排して、至る處に立派な道路を作つた、一時は草茫茫で、無用の長物であるかの如く、非難されて居たが論より證據で今は立派に三島大明神として祀られて居るのである。時勢の進運は實に恐るべきものである。東北地方の開發は全く之が爲めであると云ふても差支はない。東北地方の人達が隨喜の涙を零ほして喜んで居るのも決して無理ならぬことである。無論是も自動車發展の御蔭である。或は將來飛行機の時代になるかも知れぬが、それにしても地上の道路は多々益々必要になつて來ることは決して疑ふ餘地はない。蓋し鐵道にしても、飛行機にしても、自動車にしても、各々其の分野がある、其の特長がある、或は多少は交又するにしても、大體に於ては決して相侵すことはないのである。即ち双々相助け相補うて交通機關の完成を將來するのである。而かも之が根本となり、基準となるものは依然として道路である。完成なる道路無かりせば如何に文明の利器があつても佛作つて魂入れずである。九仞の功一簣に缺くのである。例へばガソリン消費量にしても、速力にしても、牽引力にしても、積載量にしても、道路の良否に依つて非常の相違を來するのである。普通の馬力ですらマカダム道路で米十九俵を挽き得るものが從來の砂利道では僅かに五俵に止まり、コンクリート道路の如きは優に三十八俵を挽くと稱せられて居る。獨り路面の鋪裝のみならず其の勾配の如きも、平地と坂路とでは大變の相違がある。例へば平地なれば、馬一頭で濟むが、二十分ノ一になれば馬四頭を要すると云ふことである。其他推して知るべしであ

る、實際物資の價値は大部分は其の運賃に喰はれて了ふのであるから、運賃を輕減するといふことは物價を引き下げるといふことゝなるのである、即ち、生活を樂にするといふ結果なのである、予は是等の意味よりして、租税を輕減する餘地があるならば寧ろそれだけ道路の改良費の方に振り向けて欲しいと云ひたいのである。

道路の改良が吾々日常生活の衣食住は勿論教育上にも、學校の遠近等保健上にも、引いては思想上にも、(寺院、教會講演場、集會所等に)重大の關係あることは、今更諱々しく繰返していふまでもないことである、無論國家經濟の上から見ても、非常事變の起つた時の事を考へて見ても、失職者の救濟とか、農村の振興とか、地方の開拓とか、物價の均等とか云ふやうな、社會社策上から考へて見ても、單に一片の道路問題として輕々に片付けて了ふ譯には行かぬと信するのである。

三

兎に角世の中は多々益忙がしくなる、忙がしくなれば、なるほど脚が大切になる、無論人間は生きなければならぬ、生きるべく努力しなければならぬ、同じ生きるにしてもなるべく有効に、且つなるべく有意義に生きなければならぬ、而して生きると云ふことは、つまり時の問題である、昔も今も時は金なりと云ふことに變りはないが、金と同時に時は生命である、カチクといふ時計の音が集積して一日となり、一月となり、一年となり、一生となるのである、即ち、時の延長が吾々の生命である、壽命である、長命と云ふも短命と云ふもつまり永遠無窮なる時のカレントの長短に依るのである、而かも單に生

きるばかりでなく、なるべく有意義に生きると云ふことになる、所謂朝に道を聞いて夕に死るも可なりと云はなくてはならぬ、是迄論及すると生の長短は其の内容の如何に依つて極めなければならぬことになる、即ち短命で死んでも其の實必しも短命でない人もあり得るのである、即ち時のカーレントの細長いのと、太く短く其のマス(分量)の如何と云ふことも考へなくてはならぬ、何れにしても今日は三週間か四週間で世界一週が出来る世の中となつたのである、今時の十年は昔の五十年百年に當るかも知れぬ、而かも時は金の御本尊として、人も許し我も許して一厘一毛の日歩稼ぎまでする、あの八釜し屋の銀行家ですら幾多の利害を外にして思ひ切つて、土曜半休を斷行する世の中と成つたのである、變れば變るものである、覺醒と云つても、恐らくは是ほどの覺醒はあるまい、實に近來の大快事である自動車王ヘンリーフターの如きは已に先年來一週五日、一日八時間勞働と云ふことを標榜して居る、而かも立派に成功して居る、兎に角、事實上時は金以上に大切なものになつたことは事實である、吾々は食ふ爲めに生きるのではない、生きる爲めに食ふのである、一寸光陰不可輕などは小學校の子供ですら無意識に唱へるほど古臭いものとされて居るが、是も考へやうに依つては、世の中に新しいものは無いと同時に、新しくないものはない、現に太陽は千古萬古の大昔より不相變日々東から出て西に入つて居るけれども少しも古臭くない、所謂日新く、又日新であるから、吾々もほんやりしないで此時と云ふことをもつと眞劍にもつと眞面目に考へなければならぬ、而して此大切な時を生かして使うか、殺して使うかと云ふことは何としても交通機關の良否と云ふ問題と切り離して考へることは出来ないのである、先年予が巴里に居たとき、ノルド鐵道が非常に遅いと云ふのである

漫畫家が之を諷して、線々の上に一匹の牛がノロノロ歩いて居る畫を書いた。そして乗客の一人がなぜ此汽車は途中で停まるのかと聞いたら車掌はいま牛が前の方に居るのでと答いた。それから暫くすると、また汽車が停つた。其の乗客は再び之を尋ねた。すると車掌君濟した顔で、先刻の牛が又線路上に出來ましたのでと答へたと云ふ笑話を聞かされたことがある。

之は決してよそごとではない。現に我が東京の眞中でも立派な舗装道路の上を牛車がノロノロして居るのを見受けることがある。況して一步郊外に出ると遅々たる牛車のあとを自動車が見失はなからついで行かなければならぬやうなことは、決して珍らしくないのである。斯うなると文明の利器も泣かされるを得ない。即ち自動車専用道路法の制定さるゝ所以であらう。予は産業道路の開発と共に是非自動車道路の一日も早く實現されて其の能率を十分に發揮し得る所の來ることを切に希望して止まないものである。